

Title	比較を生きることについて：ポストplural人類学へ向けて
Sub Title	Comparison as a form of life: towards a post-plural anthropology
Author	Mohácsi, Gergely(Morita, Atsuro) 森田, 敦郎
Publisher	三田哲學會
Publication year	2011
Jtitle	哲學 No.125 (2011. 3) ,p.263- 284
JaLC DOI	
Abstract	科学技術が日常生活にますます浸透しつつある現代世界において、多様な見方を同時に生きすることは、当たり前だといえる。その結果民族学の基本的な手法とされてきた。「比較」は、客観性を思考する人類学者が俯瞰的に対象を眺める視点に属するのではなく、移動し、差異を認め、そこから知識を生み出そうとする人々が行う実践の中の一要素となってきた。本稿が焦点を当てるのは、こうしたグローバル化する科学技術に従う比較の氾濫である。一方、日常的に生きられる比較のあり方を、多様な事例研究を踏まえて描き出すことで、いわゆるポストpluralの世界を把握しようとする。さらにこれを、エンジニアリングと医療という「日々の通約」の二つの事例をとおして、人類学者のフィールドワークにおける比較と併置し存在論的な展開を図るための方法論を提案する。 Anthropologists, in the field, work to recognize differences through continuously contrasting their findings with the cultural and other kinds of knowledge they bring from home or elsewhere. They keep comparing in order to make sense of the links between the particular and the general. On the other hand and this has been studied less thoroughly so far , such comparative work is also part and parcel of the very practices under study in anthropology. It is this implicit interplay between different scales of comparison that we want to reflect upon in this article. Through two short case studies of engineering in Thai and medical technologies in general we argue that the increasing mobility of scientific ideas and technological innovations is generated by practices that accumulate comparisons and contrasts on many levels. This will lead us to challenge ethnographic methodology from the vantage point of a post-plural

	understanding of the world.
Notes	特集：人間科学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000125-0263

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

比較を生きることについて

——ポストプルーラル人類学へ向けて——

——モハーチ ゲルゲイ* 森 田 敦 郎**——

**Comparison as a form of life:
towards a post-plural anthropology**

Mohácsi Gergely and Atsuro Morita

科学技術が日常生活にますます浸透しつつある現代世界において、多様な見方を同時に生きすることは、当たり前だといえる。その結果、民族学の基本的な手法とされてきた「比較」は、客観性を思考する人類学者が俯瞰的に対象を眺める視点に属するのではなく、移動し、差異を認め、そこから知識を生み出そうとする人々が行う実践の中の一要素となってきた。本稿が焦点を当てるのは、こうしたグローバル化する科学技術に従う比較の氾濫である。一方、日常的に生きられる比較のあり方を、多様な事例研究を踏まえて描き出すことで、いわゆるポストプルーラルの世界を把握しようとする。さらにこれを、エンジニアリングと医療という「日々の通約」の二つの事例をとおして、人類学者のフィールドワークにおける比較と併置し、存在論的な展開を図るための方法論を提案する。

Anthropologists, in the field, work to recognize differences through continuously contrasting their findings with the cultural and other kinds of knowledge they bring from home or elsewhere. They keep comparing in order to make sense of the links between the particular and the general. On the other hand

* 慶應義塾大学先導研究センター研究員

** 大阪大学大学院人間科学研究科講師

—and this has been studied less thoroughly so far—, such comparative work is also part and parcel of the very practices under study in anthropology. It is this implicit interplay between different scales of comparison that we want to reflect upon in this article. Through two short case studies of engineering in Thai and medical technologies in general we argue that the increasing mobility of scientific ideas and technological innovations is generated by practices that accumulate comparisons and contrasts on many levels. This will lead us to challenge ethnographic methodology from the vantage point of a post-plural understanding of the world.

科学技術は、比較の複雑さを考える上でとくに興味深い現象である。グローバル化が進む今日、人類学者がフィールドで出会う科学者、機械工、医師、農民たちは自分たちの活動を他の国や地域の活動と頻繁に比較している。こうした比較の中で、科学技術は異種の人とモノの移動と結びつき、多面的な様相を帯びて立ち現れる。¹ こうして、科学技術がグローバルに展開し日常生活に浸透する現代の世界では、多様な見方を同時に生きたことは当たり前の現実になりつつある。その結果、人類学の基本的な手法とされてきた「比較」は、この世界を移動し、差異を認め、そこから知識を生み出そうとするさまざまな人々の実践の一要素に組み込まれるようになってきた。

本稿では、科学技術の移動に伴うこうした比較の氾濫を検討するために、まず私たちの立場を文化人類学と科学技術論の間で明らかにしてから、次の二つの水準に焦点をあわせて考察を進めていく。第一に「日々の通約」と民族学のフィールドワークの比較を併置し、人類学が前者からどのような方法論上の教訓を引き出すことが出来るのかを問う（方法の水準）。第二に、エンジニアリングと病気の二つの事例を踏まえて、日常的に生きられる比較のあり方を明らかにしよう（問題の水準）。さらに本稿では従来区別されていた問題と方法の水準の関わりに焦点を当てて、ボス

トブルーラル人類学に向けた新たな試論を紹介する。私たちのここでの主張は、さまざまな比較によって成り立つ科学技術の実践を追いかけることは、人類学の方法論を再検討する貴重な機会を与えてくれるだろう、というものである。

1 比較研究としての民族学

比較は、人類学研究の命綱であると同時に、しばしば文化研究に厄介な問題をもたらしてきた。機能主義から構造主義にいたる比較研究において、人類学は極めて多様な民族誌データを「宗教」や「親族」といった西洋的なカテゴリーに分類してきた。多くの論争で繰り返述べられてきたように、異文化研究の方法はさまざまであるとはいえ、その特筆に値するのは比較の手段に他ならない（例えば Boas 1940; Evans-Pritchard 1961）。そして、何と何を比べればよいかという点が議論されながらも、比較そのものは、人類学的理解の基盤として引き続き用いられてきたといつてよい。顕著なことに、ギアツほどの歴史主義的な立場からでさえ、比較研究の条件を特定することが民族学の正否を左右するという。彼はこう述べる：

「中心課題は、比較の適切な条件と適切な枠組とを発見、ないし創り出すことであって、そういう枠組の中に留まることによって、本質的に異質であるからこそ事態についての理解を深めさせる仕方で、本質的には何らかの共通性を持たない雑多この上ない現象を素材として、吟味して行かなければならないのである。」（ギアツ 1973:91）²

ただし、ここで注意しなければならないのはギアツが、イスラームの二つの現れ方を「宗教」という文脈のなかで比べようとするのではなく、比較の条件を創り直す作業によって（民族誌的な）材料の特殊性を読み出そ

うとしている点である。そしてよく知られているように、こうした宗教の比較研究から創作された「文化システム」の概念は、ギアツ自身の後期において、普遍的な枠組みとして具体化されてきたのである（ギアツ 1987）。

だが、このような普遍性にはしばしば疑問符がつけられてきた。とくに、1980年代以降の人類学では比較は原理的に不可能であるという声が支配的になっていった。こうした中で、自然科学やポストコロニアリズム論、フェミニズム等の批判を受けた文化人類学は、普遍的な枠組みに基づく「比較」を民族誌という方法によって乗り越えようとしてきた。この時代には文化相対主義に新たな意味合いが加えられ、それは世界の比較不可能性を尊重しつつ、グローバル時代における多元性を理解する唯一の方法とみなされるようになってきた（アパデュライ 2004; 小田 1997）。そこでは、複数の表象によって構築される他者性、もろもろの行動や経験、考え方から成り立つ異質の価値観、つまり文化の相対性が強調されてきた。だが、地域／社会／文化の個別性の記述への関心の高まりをもたらしした相対主義の隆盛は、比較への取り組みの停滞という副産物を生み出している（出口 2003）。

しかし、人類学にとって比較は、多様な地域から集められた民族誌を分析し、理論や知見を生み出す手段にとどまらない意味を持っている。民族学的フィールドワークの過程には、研究者が慣れ親しんだ自文化と研究対象となる異文化の比較が潜在的に組み込まれているからである。それゆえ、世界の多様性を観察者として描き出そうとする民族誌の実践と比較は切っても切れない関係にある。本稿では、古典的な人類学の比較研究とそれを批判的に捉えてきた文化相対主義の間の、本質主義的でも構築主義的でもない視点の可能性を実験してゆきたい。そこで示唆的なのはケンブリッジ大学のマリリン・ストラザーンの研究である。

2 部分的な関係性

相対主義の思想に対してストラザーンは、メラネシア社会の諸実践と人類学者の民族誌的手法を並置し、両者の間の部分的な関係を明らかにする新しい比較の試みを行っている。代表作である『The Gender of the Gift』(Strathern 1988)をはじめ、メラネシアの贈与と欧米における生殖技術をつなぐ予想外の側面を見出した彼女の研究は、人格とモノの関係性を問い直すとともに、比較研究の新たな地平を切り開いた。

そのひとつの例として挙げられているのは、ニューギニアの高地民族であるオク(Ok)族の儀礼的实践である。オクの人々について論じてきたノルウェーの人類学者フレデリック・バルトによれば、彼らは儀礼についての知識が世代交替や忘却によって失われることに非常に意識的であり、絶えず生じる損失を周りの集団の儀礼についての情報の断片によって補おうとしている。この損失の感覚と比較の作業は、オクの人々の儀礼とコスモロジーに常に変化するダイナミズムを与えている。ここでストラザーンはさらに、この比較のダイナミズムがそれぞれ集団の実践と、「メラネシア」と「欧米社会」を比べようとする人類学者の手法の双方に畳み込まれ(im-plicated)ていると強調する(Strathern 2004: 95-98)。では、このような複雑な関係性をどのように把握すればよいのか。

ストラザーンは、こうした状況を描き出すために、人類学の理論そのものを民族誌の素材の一部として再帰的に取り込むことを提案するのである。

彼女がここで注目する、現地の人々と人類学者の比較の錯綜する関係の中では、比較は、従来のように対象物を超越する基準(scale)に依拠してきた垂直的な「解釈」ではなく、水平的な(lateral)ものとして捉えられる。ここでは比べるための超越的な基準は設定されず、比較対象のモノ自体が基準となる。モノは、それ自体が比較の基準として振る舞うモノ-兼-

比較を生きることについて

基準 (thing-cum-scale) になり、比較はモノとモノの間をつなぐ関係ではなく、基準と具体物の間を変容するモノの潜在性として捉えられるのである (Holbraad and Pedersen 2009).

ストラザーンによる比較へのアプローチは、次のようなことを示唆していると考えられる。すなわち、文化的現象の多様性が相対的なものであるのは、それがさまざまな実践で他の現象と比べられたり、そこで人とモノが関係づけられたり、干渉したりする限りにおいてである。民族学は、人々が行う無数の比較の実践と並んで、まさにこのような干渉と関係を生み出す実践なのである。さらに、ストラザーンはこうした干渉が近代社会において、現実をますます新たな範囲へと拡張させる役割を果たしていると説く。そこで彼女が注目するのは、ひとつの領域・実践が他の領域と共鳴し合う相似関係 (analogy) である。先に述べた現地の人々の比較と民族誌家の比較の共鳴はまさにその恒例である。ストラザーンはさらに、新しい生殖技術の普及にともなう親族関係と遺伝学の相似関係を取り上げて、西洋の日常生活における相似関係の増殖を論じている。さらに彼女は次のように述べる。

「各々の領域 (<親族>、<知識>) が一おそらく直接影響を及ぼしあわないように見える連想や含意などを通じて一分離されているかぎり、アナロジーの可能性が存在する。そして分離されている限り、一方は他方に対して自らの特性を授けていくことで、それぞれ異なる現実感をもたらすのである」 (Strathern 2005: 70).

こうした部分的な関係性においてこそ、異なった領域の特異性が見いだされるようになる。人格とモノのそれぞれ違う知られ方の間のアナロジーは、親子関係と遺伝学を分けるという関係であると同時に、それらの関係を互いに畳み込ませる装置でもある。

またクトラザーンが取り上げた諸問題は、その後多くの研究者によってさらに展開されてきた。民族誌の対象と方法を同時に問う「関係性」(relationality)は2000年代以降の人類学を特徴づける問題となったと言える(Povinelli 2001 など; Riles 2001; Tsing 2005)。これらの人類学者が共有しているのは、多様な見方を浮かび上がらせるという比較は、もはや主体としての人類学者の方法に限らず、私たちの日常までに拡張している実践だ、という意識である。

3 旅する科学技術

このような比較の実践が近年ますます顕著なっている領域に科学技術があげられる。単一の基準に基づく評価や標準化をもたらす科学技術は、しばしば逆説的に地域的な差異を際立たせていく。たとえば、多国籍企業のグローバルな展開は、同一タイプの工場の間にも、地域ごとに労働習慣や技能の違いがあることを明らかにしてきた(Downey and Lucena 2005)。その結果、今日のエンジニアたちはますます文化的な差異と技術との関係に敏感になりつつある。また、WHOを中心とした国際的な保健基準の浸透や途上国における近代医療の導入は、統一的な診断基準や技術を多様な社会文化的なコンテキストに浸透させる一方で、人々の健康の多様性、それと社会文化との結びつきをますます明らかにしつつある。

科学技術があらわにするこうした多様性については、人類学と科学技術社会論の境界領域で、新しい光が当てられてきた(例えばDumit and Downey 1997; Jensen and Rødje 2010; 山下・福島 2005)。これらの研究の中から、私たちの比較への関心と深く関連する二つの課題をあげることが出来る。一つは、科学技術の物質的效果、およびモノが人間の社会的活動の中で果たす役割への関心である(Henare, et al. 2007; 田中 2009)。科学技術論がもたらしたインパクトのひとつは、科学的事実が構築される過程において、装置、計測器、グラフ、写真、テキストといった

比較を生きることにについて

モノが果たす役割であった。科学的活動とそれが生み出す知的・物理的な力は、個々の人間の合理的な認知過程の産物というよりは、これらの人工物がタイトに絡み合うことで生み出した、緊密に作動するモノと表象のネットワークの効果であった、と物質的記号論 (material semiotics) は主張する (Latour 1990; Pickering 1995)。

科学技術論のこの知見は後に、同時代のストラザーンらが展開してきた人格とモノについての議論と深く共鳴することになる。ストラザーンやアルフレッド・ジェルらは 1980 年代からすでに、贈与、家畜 / 人関係、芸術といった分野において、モノとそれを生み出す人の内なる能力が多様に想像され得ることを指摘するとともに、モノを介してあらわになるこの内なる能力が人格及び社会関係の構成する主要な動因となることを示していた (Gell 1998; Strathern 1988; 1999)。彼らの研究は後にモノに焦点を当てて、「存在論的展開」を唱えるグループの台頭へとつながっていく (Holbraad 2009)。

もう一つの課題は科学技術の移動が生み出す人とモノの結びつきをめぐる関心の高まりである。ブルーノ・ラトゥールは、科学的知識の産出において、標本や写真、図面、地図、計測データといった情報を体化した人工物が、測定場所、観察場所から実験室、博物館などへと移動することの重要性を指摘してきた (Latour 1990)。大航海時代から 19 世紀にかけて、西洋諸国が世界各地に派遣した探検隊とそれが持ち帰った資料の分類に基づく博物学が、生物学、地理学、人類学といった近代科学の基礎となったという史実は、旅が生み出す人とモノの新たな結びつきが知識と力の産出に果たす役割を例証している (ラトゥール 1999)。

ここでもまた、知識産出の重要な鍵となったのは、異なる地域で得られた標本どうしを対照し、乾燥した植物標本を精密な植物画と照らし合わせる比較の役割であった。こうした比較は、人とモノが常に動き続ける限りにおいて可能になるものである。また我がの視点から重要なこととして、

このような移動性は、遠征隊が赴く植民地、それを支援する強力な国家、学術活動に資金を提供する裕福な慈善活動家といった社会経済的な要因、ますます発展する遠洋航海用の船舶、航路を支える補給路といった技術的な要因の絡み合いによって支えられていたのである。

ジェームズ・クリフォードも言うように、文化の多様性を比較するという人類学に与えられてきた役割は、近代をとおして成立した旅と知識産出のポリティカル・エコノミーの中で確立され制度化されてきたのだと言えよう（クリフォード 2002）。

4 ポストブルーラル人類学：移動、モノ、通約

人類学はその成立当初から比較の営みと分ちがたく結びついてきた。人類学者はフィールドで目にしたものを母国から持ち込んだ常識やフィールドの他の物事と比較し、そこに差異と類似を見いだしていく。一方、上述したように、こうした比較の作業は人類学者が観察する人々の実践の一部でもある。こうした「比較」は、客観性を思考する人類学者が俯瞰的に対象を眺める視点に属するのではなく、移動し、差異を認め、そこから知識を生み出そうとする人々が行う実践の中の一要素である。さて、人類学者は人々が比較をとおして作り出すこの複雑な世界をいかにして描き出すことが出来るのだろうか。比較と、人とモノの移動が生み出す結びつきはどのように関係しているのだろうか。また、この中で民族学による比較はどのように位置づけられるのだろうか。

多くの学者が指摘したように、複数の場所の間を行き来する人間の旅が可能にした、対象物を包含する抽象的な観点である従来の比較に対して、実践そのものにおける比較は、主体としての旅人（人類学者）の見え方 (perspective) ではなく、有害物や生薬など、さまざまなモノの中に埋め込まれた実践である (Fortun 2001; Hayden 2003)。そしてストラザーンは、こうした「旅する比較」(Mohácsi and Morita 2009) から広がって

比較を生きることについて

いく秩序をポストブルーラルな世界観 (postplural perception of the world) と呼ぶ (Strathern 2004: xiv).³

ポストブルーラルというのは、さまざまな歴史的な時代や地理的場所から切り取った要素を、全体としてかみ合わない新たな形で組み立て直す文化的交流と借用のことを示している (Strathern 1992: 77).⁴

では、比較を主たる方法とする人類学者は、科学技術の展開に巻き込まれた人々が行う比較から何を学ぶことが出来るのだろうか。人類学の方法から人々の実践の一部へと拡張しつつある比較の動態を明らかにするために、ここでは次の三つの戦略的要素に焦点を当てる。

第一の戦略的な要素は、比較を増殖させる科学技術のグローバルな展開がはらむ移動性の次元である。医療やエンジニアリングの実践と社会や文化の比較が結びつくようになった背景には科学技術が世界をくまなく移動する現実がある。科学技術の移動は人とモノの複雑な相互関係、さらにそれを可能にする交通網や、情報技術、測定器などのインフラによって支えられており、それを介してグローバルな政治経済と結びついている。ポストブルーラル人類学では、上からも分かるように、こうした移動性を、日常的な比較の環境を形作っている要因として把握し、その様態の記述と分析を行う。

第二の要素は、比較の持つモノ、物質としての側面である。科学技術における比較は、しばしばモノの形をとった標準、測定器、機械などとの関係で現れる。このモノ性は、比較が行われる視点の所在という点でも従来とは対照的である。古典的な人間科学において、比較は対象物を包含する抽象的な観点に依存しているとされてきた。この視点を生み出すのはふたつの場所の間を移動する人間の旅である。一方、科学技術を取り巻く比較は、薬剤や農業機械などのモノが移動によって不安定化したり、移動先の

人々の間に新たな関係性を生み出したりすることで現れる。この側面をより具体的に把握するため、ここで提案する研究プログラムでは、移動するモノが人々の間に比較を「喚起」という過程に注目する。さらにこれから実践の中の比較が生み出す物質・社会的な帰結は、科学技術に媒介されながら文化と社会の多元性を生きるという現実そのものを構成していく。その意味で、ポストプルーラル人類学が対象とする比較は認識論的なものであると同時に物質的、存在論的なものでもある。

第三の要素は、こうした実践としての比較が浮き彫りにする通約の事象である。比較は結びつきを生み出し、結びつきは人、人工物、出来事からなる異種の諸次元を絡み合わせ、さらにはそれらを再構成する。この意味で比較は、多様な見方を浮かび上がらせるだけにとどまらない。比較は科学技術のグローバルな移動性と結びついて、私たちの生が、遠く離れた見知らぬ事物と結びついた絶え間ないプロセスの一部であることをあらわにする。もし、上述したように、民族学の比較と日々の比較との区別が可能であり、実際に必要であるなら、それと同様に、比較する側と比較される側の関係性を問うことも等しく当を得たものであろう。例えば病気に関する複数の知識と経験を比べるときに、それらが分けられる独特の仕方を特定する必要がある。つまり、多様性という比較装置においては、そこには変化する（外延的な）関係よりも、関係する（内包的な）変化があり、それは異なる差異を通約可能にする—もしくはしようとする—ことになる（Viveiros de Castro 2010）。

上記の3点に即した方法論がどのようなものになりうるかを検討するために、本稿では、医療技術と機械工業の二つの事例をとおして、比較についての新しい視点を探っていく。

5 機械に畳み込まれた関係性

ここで最初に取り上げるのは、森田が2001年から調査を行ってきたタ

イの土着の機械工業である。現在、日系企業を初めとする多国籍企業の生産拠点として知られているタイだが、1960年代から自動車修理や農業機械の製造を中心にした独自の中小工業が発展してきた。都市部だけでなく、農村部にも広がるこうした工場は海外から輸入した機械の改造や中古部品を用いた独自機械の製造を中心に地域向けのさまざまな機械を製造してきた。次に紹介するのは、筆者が調査中に遭遇したあるエピソードである。

2003年の雨期入り直前の時期に、筆者が調査を行っていた東北タイ、コラート市の周辺では、四輪トラクターの登場に伴って新しい農業機械が日本から導入されつつあった。四輪トラクターの後方には、PTO (power take off) 軸と呼ばれるエンジンからの回転を伝える軸が突き出ており、ここから回転運動を取り出すことによって農機具を動かすことができる。ロータリーはこの回転運動を用いて耕耘爪を回転させて地面を耕す機械である。これは犁やディスクプラウで行う耕起とその後に別の農機具で行う代掻きをいつぺんに行うことができるため稲作には便利な機械で、日本ではほとんどの水田で用いられている。筆者の調査のさなかの2003年の6月ごろ、ロータリーは筆者の調査地である東北地方に普及し始めた。

タイでのロータリーの普及は日本から輸入した中古品からスタートしたため、日本からの中古トラクター輸入も行っていた筆者のインフォーマント、チャイさんの農業機械工場はその先陣を切ることになった。新しい機械に関心を抱いた地域の農民たちは、チャイさんの工場を訪れたのである。しかし、ロータリーはすぐに定着したわけではなかった。最初に販売されたロータリーは使用するとすぐに耕耘爪に草が絡んで回転が止まってしまった。ロータリーを動かすためには、わずかな距離ごとに立ち止まって草を取り除くという煩雑な作業が必要だった。当然、ロータリーを買った農民たちはこれに満足せず、すぐにチャイさんの工場に引き返してこれを何とか使えるようにしてくれと要求した。そこからロータリーの改造が

始まった。

チャイさんは、実際に水田に行って機械の状況を観察し、さらに草の絡まったロータリーを工場に運び込んで農民たちとともに対策を考えた。工場で彼らはロータリーの耕耘爪の形状や草の絡み方を調べ、草が絡む原因について仮説を立てたり、草が絡まない耕耘爪の形を提案したりして議論を続けた。どうやら爪を曲げたほうがいいということは確かなのだが、どのように爪を曲げれば草が絡まないのかについてなかなか意見がまとまらなかった。最終的にチャイさんはよその工場が試作した新型の耕耘爪をかつて取り寄せたことを思い出し、それを参考にして耕耘爪を 90 度折り曲げる改造を行うことにした。この改造はみごとに成功し、爪を曲げたロータリーはその直後の試運転で草を絡ませずに耕耘することができた。この後から、輸入した中古ロータリーはすべて工場で耕耘爪を 90 度近く曲げてから販売されることになった。

ここでの議論と作業の中には、人類学者が行っているのと微妙に異なる「比較」が目につかない形で埋め込まれている。チャイさんをはじめとするタイの機械工たちは、しばしば日本の技術や環境、社会について語る。彼らは日本から輸入した農業機械を修理・改造し、日本から輸入した中古工作機械を使い、日本製の鋼材や汎用部品を利用している。そのため彼らは、これらのモノをとおして日本についてよく知っている。だが本当に驚かされるのは、彼らが機械そのものについての知識だけでなく機械が使用される日本の農業環境についてもかなりの知識を持っていることである。言うまでもなく、ほとんどの機械工は日本に行ったことがない。彼らは日本の環境についての知識をいってみれば機械そのものをとおして深めているのである。

ロータリー耕耘機が水田を耕耘するためには、爪の形状と土壌、水田に生える雑草の茎や地中の根、ロータリー軸の回転速度、トラクターの速度などの間に安定した関係がある必要がある。先のトラブルで見たように、

比較を生きることについて

雑草が耕耘爪に絡みついたりすれば、ロータリーの回転軸はロックし、トラクターは停止し、農民は途方にくれてしまう。逆に言えば、日本からやってきたロータリーのデザインには、ロータリーと日本の環境との関係がいわば刻み込まれている。たとえば、ここで焦点になった耕耘爪の形状は、日本の圃場に見られる土壌、雑草、さらに農民たちの農作業の手順に適応するようにデザインされている。

そのため、タイの圃場で起きた耕耘機のトラブルは、タイの環境と日本の環境に差があることを示唆するものになる。とくに、草が絡みついた耕耘爪は、機械に刻み込まれた日本の環境と実際に使用されたタイの圃場の間の差異そのものだといえる。トラブルの原因を調べようとする機械工と農民たちは耕耘爪と雑草というふたつの環境の差異をとおして、日本とタイの環境の両方を同時に見ていたのである。

このエピソードは、機械の持つ比較を喚起する力を明らかにしている。環境との関係そのデザインの中に畳み込んだロータリー耕耘機は、新しい環境でトラブルを起こすことでふたつの環境の差異をあらわにしていた。草が絡まった耕耘爪は、タイと日本の環境をいわば二重写しのように浮き上がらせ、比較を喚起したのである。

6 病気の通約

しかしながら、同一性（例えば文化や環境）をとおして外延的な差異（例えばタイと日本）を打ち立てることは、実践としての比較の唯一の様式ではない。次の、病気の事例において、もうひとつの「通約」という様式をみてみよう。

世界の多元性に没頭してきた人類学者にとって「本質主義者」と呼ばれることは致命的な非難であろう。それはまた、人類学が他者を批判する武器でもあり、1980年代以降「オリエンタリズム」はまさにこのような批判の対象となってきた。そして、ここで取り上げている「生物医学」もこ

うした批判対象のひとつである。しかし、一見苦痛の多様な現れ方の同質化を促すようにみえる生物医学が、新たな分離のきっかけともなることは軽視することはできない。生物医学はさまざまな比較装置をとおして、身体感覚と科学知識の異なる差異を通約可能にしようとするが、それは逆説的に患者の経験と医療の知識に新たな差異化をもたらすのである。

患者の視点に立ち続けてきた医療人類学では、患者の意志を代弁する政治性への世間や社会研究の注目が高まる一方、患者の身体を代弁する科学技術はほとんど問題化されないまま批判の対象となってきた。ところが、人類学者たちが憧れてきた多元的視点は、私たちについて蓄積されている（自然の）事実の多様性にも左右される。

AIDS 治療薬の開発がその代表例である。抗レトロウイルス薬 (ARV) の臨床研究と市場導入は、国際製薬企業と途上諸国との間の不公平をめぐる非難をはじめ、同性愛差別や医学研究の構造的欠陥などの諸問題を問い直すきっかけになった (Biehl 2007; 田辺 2008).⁵ 一方社会学者の S. エプスタインが美しく描いてきた、科学へみずからを組み込む AIDS 患者の社会運動は、こうした治療の場で食い違ってくる「専門知」と「苦痛」の比較を示唆している (Epstein 1996). そこで社会的偏見と身の病と同時に立ち向かう HIV 陽性者達の経験が、抗ウイルス剤の困難な開発の一部として、病因論の不可欠な要素となってきた。ジェンダーや人種による相違に着目する彼の視点に立てば、科学者の研究と患者の生存を結びつける治療薬開発の臨床試験の装置において、生物学上のカテゴリーと人間の価値観の有様な連続性が見えてくる。こうした医学上の事実が、患者も含む多くの人やモノの協調に基づくことは、偶然とはいえない。エプスタインは、薬、より正確には薬を飲むという振る舞いが、その協調の技術的な媒介になると明示することで、病気の通約による比較実践の最たる例を与えている。

この最後のポイントは近年の医療技術の社会研究において極めて重視さ

れる側面である。つまり医学は、病気を治す知識であると同時に、多くの
人々の病気であるという苦悩を取り込むものでもある。顕著なことに、そ
の二つは医療介入の中でさまざまな技術や器具による比較実践をととして
互いに干渉しあう。動脈硬化症の治療における調整や協働の反復を細かく
描写してきたアンネマリー・モールの研究は、こうした比較民族誌の代表
例としてあげられる (Mol 2002)。患者の脚に感じる痛みと、顕微鏡の下で
見える血管のサンプルという著しく異なる存在物がいかにして「動脈硬化
症」という同一の意味をもたらすのか。モールによれば、それは数えきれ
ない行動と機器によるコーディネーションの結果——つまり病気の通約、
と急いで確認しておこう——である。モールが言う医療実践は、多種の診
断法の効果を比べることから、個々の治療方針と人口のリスクを合わせる
ことまで、人間の価値と生物学の数値を相互的に反映していくのである。
ならば、治療の現場に浸透していく技術が、人間の多様性を押さえつける
のではなく、逆に知識と経験の通約不可能な次元を結びつけようとするこ
とで、その多様性をあらわしていくと考えられる。

こうした問題はこれまで以上に差し迫っている。治療はもはや病気を治
そうとする介入の瞬間より、「病気と付き合う」という比較の連鎖なので
ある。喘息やうつ病などの慢性病、そしてその治療が、自己管理の人工物
をととしてますます私たちの日常生活に深くかかわっていく。一方、医療
技術は多様な人々の生活を支える上で、ある病気に関する知識を可能にし
ている、「生のテクノロジー」である。医療機器を用いる人びとは、一人
一人の生き方を再構成するだけでなく、生死や善悪の相違をめぐる新た
な課題をもたらしている。すなわち、私たちの生活と科学の真理は同じ医
療技術をととして成り立っているといえる (モハーチ 2008)。

もうひとつ分かりやすい例を挙げよう。化学療法から抗癌剤まで、癌の
治療はさまざまなテクノロジーを盛り込んだ上でそれぞれ異なる生き方を
可能にしている。治療(=技術)がなければ唯一の命を長らえることさえ

できないのである。ならば、癌を治療する—ときにはしない—というさまざまな医療技術を単に疑うこと、あるいは人間の経験を「医療化」する手段として批判するのは容易ではない。代わりに、医療技術を実践するという日々の比較は、単一と複数の関係性についての疑問を投げかけることをここで主張したい。「病気」という統一の事実と「生活」の多元的な経験はいったいどのように「付き合っている」のか、これは病気を通約しつつある比較実践の反復から問われるとき、「単一」と「複数」の間の論拠を与える。

7 比較研究 2.0

従来の民族学研究において、西洋と非西洋の社会・文化の比較は、人類の多様性と統一性を明らかにする分析ツールとして採用され（本質主義）又は否定（相対主義）されてきた。これに対して本稿で論じてみたように、「比較」を、方法と実践を結びつける主要要素として再検討することで、人類学における相対主義と本質主義の対立を乗り越える可能性がみえてくる。さらに、私たちが生きるポストプルーラルの世界を描き出す方法として、民族誌独自の視点を活かすことを提案してきた。⁶

人間と非人間のハイブリッドの増殖を軸にアクターネットワークセオリー (ANT) を展開してきたブルーノ・ラトゥールは、この点を科学技術実践に内在する相対化として論じる。「私達は関係性の実践 (practice of relativism) も相対主義 (the word relativism) という言葉も真摯に受けとめることがなくなっていたのである。（あらゆる）関係を樹立する、（それら）を共約可能にする、測定装置を調整する、度量衡の連鎖を設ける、対応項目の辞典を作成する、規範や基準が相容れるかどうか議論する、測定されたネットワークをさらに延長する、価値測定装置を設けてそれをめぐる分析を行う—そうした活動が「相対主義」という言葉のもとで目論まれているのだ。絶対的相対主義は、その宿敵でもあり兄弟でもある合理主義

同様、最初に測定装置を備え付けなければならないことをすっかり忘れて
いる」(ラトゥール 2008:192; 日本語訳修正は引用者による)。本稿では、
異なる関係性を互いに畳み込ませる農業機械と、病気の通約を可能にする
医療技術の二つの例を用いて、こうした相対主義と本質主義の間を開拓し
はじめ、それをポストプルーラルの空間と呼んできた。

人類学者の Viveiros de Castro が言うように、人類学は比較の研究で
ある限り、それは人と人を比べることと同時に、人と人を比べている私た
ちの世界を描写する学問でもある (Viveiros de Castro 2003)。「比較研究
2.0」とも言えるこのポストプルーラル人類学は理論と実践のこうした相
互的包含に注目し、次の二点を柱に独創的な方法論の展開を狙っている。
まず、それは文化現象の比較不可能性を主張してきた文化相対主義に対し
て、比較をとおして関わり合う世界を把握しようとするものである。これ
を「相関主義」と呼ぶことができる。相対主義は、還元不可能な「差異」
を、グローバル時代における多元性を把握する唯一の観念とみなしてき
た。一方、本稿では、比較そのものを民族誌の対象とすることでこの前提
を問い直すことを提案してきた。異種の存在物を結びつける日々の比較の
実践から見えてくる相対化の連鎖は、文化批判の手段ではなく、人類学者
が描き出すべき対象なのである。

第二に、それぞれの文化が独立した単位であることを前提に、社会と自
然の全体性を強調してきた構築主義的な思想に対して、私たちは、民族誌
の対象を人格とモノの多次元的な関係性へと拡張することを提案してき
た。これは複数の通約不可能な次元を同時に生きるという極めて現代的な
状況を「ポストプルーラル人類学」の観点から記述し直すことでもある。
ここでは、人類学が対象を記述・分析する際に用いる方法としての比較
と、対象の人々が行う比較は並行的な関係にあり、ともにこの多元的で現
代的な状況を構成しているのである。

そして後者の指針に従うことは、科学技術の想定外（つまり非技術的）

で、劇的な効果を私たちに気づかせてくれるだろう。

注

- ¹ 伝統医学の研究をはじめとする医薬開発やさまざまな民俗分類を素材として利用する AI（人工知能）研究も示すように、現在の科学技術において、社会や文化についての人類学的な比較が重要な役割を果たしている（例えば Benfer, et al. 1991; Hayden 2003 を参照）。
- ² “The central task is to discover, or invent, the appropriate terms of comparison, the appropriate frameworks within which to view material phenomenally disparate in such a way that its very disparateness leads us into a deeper understanding of it.”
- ³ “Strathern terms “postplurality” this skepticism with respect to the notion that knowledge of the world is increasing in a qualitative sense through the proliferation of perspectives. From a postplural vantage point, theoretical perspectives are seen to be produced as much as they are producing the world. Indeed, they seem to be folded into all kinds of empirical matters on any number of different “levels.” Theoretical perspectives appear here also as fractal figures—partial views, engaged in ontological politics, vulnerable and changeable, situated as they are in the thick of things” (Gad and Jensen 2010: 73).
- ⁴ “Postplurality means a sustained cultural interchange and borrowing whereby elements cut from diverse times and places can be recombined, though they cannot fit together as a whole” (Strathern 1992: 77).
- ⁵ また、日本における汚染血液事件からも分かるように、医療技術の使 / 誤用は、臨床から政府まで意思決定機構のあり方への批判を招く力をもつ。
- ⁶ ブラジルの人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス＝デ＝カストロが鋭く指摘するように：“…if anthropology ‘is’ a science of something, it is undoubtedly the comparative science of the relations that make us human. But since comparing is relating, and vice-versa, our discipline is twice over the science of the ‘and,’ that is, of universal relational immanence. Not of the ‘is,’ therefore, and still less of the ‘ought’—but simply of the ‘and’” (Viveiros de Castro 2003: 2).

参考文献

- Benfer, Robert Alfred, Edward E. Brent and Louanna Furbie-Losee, 1991. *Expert Systems*. Newbury Park, Calif.: Sage Publications.
- Biehl, João, 2007. *Will to Live: AIDS Therapies and the Politics of Survival*. Princeton, N.J.; Woodstock: Princeton University Press.
- Boas, Franz, 1940. The Limitations of the Comparative Method of Anthropology. In *Race, Language and Culture*. pp. 270–288. New York.: The Macmillan Company.
- Downey, Gary Lee and Juan C. Lucena, 2005. National Identities in Multinational Worlds: Engineers and 'Engineering Cultures.' *International Journal of Continuing Engineering Education and Life-Long Learning* 15(3–4): 252–260.
- Dumit, Joseph and Gary Lee Downey (eds.), 1997. *Cyborgs & Citadels: Anthropological Interventions in Emerging Sciences and Technologies*. Santa Fe, N. M.: School of American Research Press.
- Epstein, Steven, 1996. *Impure Science: AIDS, Activism, and the Politics of Knowledge*. Berkeley: University of California Press.
- Evans-Pritchard, E. E., 1961. *Anthropology and History, a Lecture Delivered in the University of Manchester with the Support of the Simon Fund for the Social Sciences*. Manchester [Eng.]: University Press.
- Fortun, Kim, 2001. *Advocacy after Bhopal: Environmentalism, Disaster, New Global Orders*. Chicago: University of Chicago Press.
- Gad, Christopher and Casper Bruun Jensen, 2010. On the Consequences of Post-ANT. *Science Technology & Human Values* 35(1): 55–80.
- Gell, Alfred, 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford ; New York: Clarendon Press.
- Hayden, Cori, 2003. *When Nature Goes Public: The Making and Unmaking of Bioprospecting in Mexico*. Princeton: Princeton University Press.
- Henare, Amiria J. M., Martin Holbraad and Sari Wastell (eds.), 2007. *Thinking through Things Theorising Artefacts Ethnographically*. London: Routledge.
- Holbraad, Martin and Morten Axel Pedersen, 2009. Planet M: The Intense Abstraction of Marilyn Strathern. *Anthropological Theory* 9(4): 371–394.

- Holbraad, Martin, 2009. Ontology, Ethnography, Archaeology: An Afterword on the Ontography of Things. *Cambridge Archaeological Journal* 19(3): 431.
- Jensen, Casper Bruun and Kjetil Rødje (eds.), 2010. *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*. New York and Oxford: Berghahn Books.
- Latour, Bruno, 1990. Drawing Things Together. In *Representation in Scientific Practice*. M. Lynch and S. Woolgar, eds., pp. 19–68. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Mohácsi Gergely and Atsuro Morita, 2009. Traveling Comparisons: Ethnographic Reflections on Science and Technology. Paper presented at the “Travelling Comparisons. International Workshop Osaka University”. Osaka, July 20th, 2009.
- Mol, Annemarie, 2002. *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*. Durham: Duke University Press.
- Pickering, Andrew, 1995. *The Mangle of Practice: Time, Agency, and Science*. Chicago: University of Chicago Press.
- Povinelli, Elizabeth A., 2001. Radical Worlds: The Anthropology of Incommensurability and Inconceivability. *Annual Review of Anthropology* 30: 319–334.
- Riles, Annelise, 2001. *The Network Inside Out*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Strathern, Marilyn, 1988. *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. Berkeley: University of California Press.
- Strathern, Marilyn, 1992. Parts and Wholes: Refiguring Relationships in a Post-Plural World. In *Conceptualizing Society*. A. Kuper, ed., pp. 75–104. London and New York: Routledge.
- Strathern, Marilyn, 1999. *Property, Substance, and Effect: Anthropological Essays on Persons and Things*. New Brunswick, NJ: Athlone Press.
- Strathern, Marilyn, 2004. [1991] *Partial Connections*. Walnut Creek: AltaMira Press.
- Strathern, Marilyn, 2005. *Kinship, Law and the Unexpected: Relatives Are Always a Surprise*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Tsing, Anna Lowenhaupt, 2005. *Friction: An Ethnography of Global Connec-*

比較を生きることについて

- tion. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Viveiros de Castro, Eduardo, 2003. *And: After-Dinner Speech Given at Anthropology and Science, the 5th Decennial Conference of the Association of Social Anthropologists of the UK and Commonwealth, 2003*. Manchester: Department of Social Anthropology.
- Viveiros de Castro, Eduardo, 2010. Intensive Filiation and Demonic Alliance. In *Deleuzian Intersections : Science, Technology, Anthropology*. C. B. Jensen and K. Rödjé, eds., pp. 219–254. New York: Berghahn Books.
- アパデュライ, アルジュン. 2004 [1996]. 『さまよえる近代: グローバル化の文化研究』 門田健一訳, 平凡社.
- ギアツ, クリフフォード. 1973 [1971]. 『二つのイスラーム社会: モロッコとインドネシア』 林武訳, 岩波書店.
- ギアツ, クリフフォード. 1987 [1973]. 『文化の解釈学』 吉田禎吾等訳, 岩波書店.
- クリフフォード, ジェイムズ. 2002 [1997]. 『ルーツ: 20世紀後期の旅と翻訳』 毛利嘉孝等訳, 月曜社.
- モハーチ ゲルゲイ. 2008. 「差異を身につける—糖尿病薬の使用にみる人間と科学技術の相関性」 『文化人類学』 73(1): 70–92.
- ラトゥール, ブルーノ. 1999 [1987]. 『科学が作られているとき: 人類学的考察』 川崎勝・高田紀代志訳, 産業図書.
- ラトゥール, ブルーノ. 2008. [1993]. 『虚構の「近代」: 科学人類学は警告する』 川村久美子訳, 新評論.
- 出口顯. 2003. 「(特集) 人類学の方法としての比較の再検討: 序にかえて」 『民族学研究』 68(2): 214–225.
- 小田亮. 1997. 「文化相対主義を再構築する (〈特集〉文化相対主義の困難を超えて)」 『民族学研究』 62(2): 184–204.
- 山下晋司・福島真人 (編). 2005. 『現代人類学のブラクシス: 科学技術時代をみる視座』 有斐閣.
- 田中雅一 (編). 2009. 『フェティシズム論の系譜と展望』 京都大学学術出版会.
- 田辺繁治. 2008. 『ケアのコミュニティ: 北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』 岩波書店.